

<h1>指導資料</h1>  鹿兒島県総合教育センター 令和 4 年 4 月発行	<h2>図画工作科・美術科 第 49 号</h2>	
	対象 校種	小学校 中学校 義務教育学校 特別支援学校



児童生徒の「造形的な見方・考え方」を働かせる図画工作科・美術科の授業づくり

児童生徒が夢中になって活動する図画工作科や美術科の授業を行うためには、どのような考え方が必要なのだろうか。図画工作科・美術科の授業づくりの基本的な考え方について、「造形的な見方・考え方」を視点に具体的な実践例を通して解説する。

1 はじめに

図画工作科や美術科の授業を行う中で、「児童たちは楽しそうに作品をつくってはいるけれど、図工の授業はこれでいいのだろうか。」「参考作品を見せて、方法や手順も説明したので、生徒は迷うことなく作り始めたけれど、美術を楽しんでいると言えるのだろうか。」等を考え、悩んだ経験がある教員は少なくないのではないだろうか。

では、なぜこのような悩みを抱えてしまうのか。その答えの一つは、作品を完成させることを学習の目的と捉えてしまっていることにある。図画工作科・美術科の学習の魅力は、自分の思いを膨らませ自由に想像したり、自他の作品のよさや美しさを感じ取ったりしながら、自分なりの方法で表現することである。故に児童生徒たちに作品をつくらせようとするほど、このような悩みを抱えることになる。

2 「造形的な見方・考え方」について

図画工作科・美術科の学習の魅力は、先に述べたとおりであるが、児童生徒が夢中になって取り組む授業づくりをするためには、まず「造形的な見方・考え方」について理解してお

く必要がある。

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図画工作編』には、造形的な見方・考え方について以下のように示されている。

「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」と考えられる。

「～であると考えられる。」とあるように、造形的な見方・考え方は、それ自体の育成を目的にするのではなく、児童生徒が夢中になって活動している場面において働いているものと捉えたほうがよい。これは、中学校の美術科でも同様である。

では、造形的な見方・考え方が働いているとはどのような場面だろうか。図画工作科・美術科の授業においては、全ての学習過程で働いていることが望ましいが、特に顕著に現れる場面は、児童生徒が思い（主題）に向かって、それに合った方法で表現するために工夫し、試行錯誤しながら活動している場面である。この工夫や試行錯誤の中に図画工作科・美術科の魅力が詰まっている。先の悩みの例に出てきた、「迷うことなく作り始めた」は、造形的な見方・考え方が十分に働いている場面とは言い難いのである。

3 「造形的な視点」と〔共通事項〕

児童生徒が夢中になって取り組む授業にするためには、児童生徒が主体的に「造形的な見方・考え方」を働かせることができる授業づくりが必要である。そのためには、授業を通して題材について「造形的な視点」をもって考えられるように指導することが大切である。

「造形的な視点」とは、造形的な見方・考え方を働かせるための具体的な視点であり、〔共通事項〕の知識の内容と関連が深い。表1は、それをまとめたものである。

表1 「造形的な視点」と〔共通事項〕の関連

「造形的な視点」
<p>【小学校】 「<u>形や色など</u>」, 「<u>形や色などの感じ</u>」, 「<u>形や色などの造形的な特徴</u>」など</p> <p>【中学校】 <u>形や色彩, 材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり, 全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点</u></p>
〔共通事項〕
<p>【小学校：第1学年及び第2学年】 ア 自分の感覚や行為を通して、<u>形や色などに</u>気付くこと。</p> <p>【小学校：第3学年及び第4学年】 ア 自分の感覚や行為を通して、<u>形や色などの感じ</u>が分かること。</p> <p>【小学校：第5学年及び第6学年】 ア 自分の感覚や行為を通して、<u>形や色などの造形的な特徴</u>を理解すること。</p>
<p>【中学校：全学年共通】 ア <u>形や色彩, 材料, 光などの性質や, それらが感情にもたらす効果などを理解すること。</u> イ <u>造形的な特徴などを基に, 全体のイメージや作風などで捉える</u>ことを理解すること。</p> <p style="text-align: right;">※ 学習指導要領解説から抜粋 ※ 下線は筆者が加筆</p>

つまり、題材のねらいに応じた〔共通事項〕の指導事項をしっかりと押さえた授業づくりをすることが、児童生徒の「造形的な見方・考え方」を働かせることに直結しており、そのことが、夢中になって取り組む図画工作科・美術科の授業につながっているのである。

4 図画工作科・美術科の授業づくり

図画工作科・美術科の授業づくりは、題材の開発が大きな割合を占めている。それは、図画工作科・美術科という教科が、教師自身が想像力を働かせ、創意工夫を生かして題材を設定し、児童生徒の資質・能力を育成することができるように、題材ごとに作品や活動をつくりだすことが求められる教科だからである。つまり、題材をどのように設定するかが委ねられている教科だということである。

このことが、特に図画工作科・美術科を専門としていない小学校の教員にとって、図画工作科の授業づくりを難しく感じさせている一つの要因でもある。

授業づくりについて考えるに当たっては、まず次のことを念頭に置いてほしい。

「題材＝作品」ではなく、育てたい資質・能力が発揮されるような題材を設定すること。

つまり、作品をつくらせることを目的としたり、作品名や作者名を覚えさせたりするような授業にしないということである。

これは、コンテンツベース（知識・内容）からコンピテンシーベース（資質・能力）の授業づくりを示した学習指導要領改訂の大きな柱でもある。そして、図画工作科・美術科にとっては、これまでの課題であった「作品主義」からの脱却でもある。

5 授業づくりのポイント

授業づくりの基本的なポイントを「第6学年『音のする絵』：日本文教出版5・6年下」（南九州市立知覧小学校の渡邊忍教諭の実践）

を例に紹介する。この題材は、写真1の参考作品のように、様々な音から色や形をイメージし、その



イメージに合った画材や素材を工夫して絵に表す題材である。

(1) 題材のねらいを明確にする

授業を考えていくにあたり、まず授業のねらい、つまり、育成したい資質・能力を「造形的な見方・考え方が働いている児童の姿」として明確にするとよい。本題材では、次のような児童の姿を想定することができる。

- ・ 音を感じ（聴き）ながら、形や色を思い浮かべている姿
- ・ 思い浮かべたことを基に、表したいことを見付けようとしている姿
- ・ 表したいことを表現するための方法について工夫しようとしている姿

このように児童の姿としてイメージを明確にすることで、各学習活動の意味を明確にすることができる。

(2) 学習活動について考える

想定した児童の姿を引き出すために、学習活動について〔共通事項〕を基に以下のように具体化する。このことは、題材を造形的な視点で捉えさせるために大切なことである。

- ・ 題材との出会いの場面で、参考作品の形や色に着目させ、動き、バランス、色の鮮やかさなどの造形的な特徴と音との関連について感じ取らせる。
- ・ 見通す場面で、実際に様々な音を聴かせながら、形や色を思い浮かばせる。
- ・ 思いをもつ場面で、音を聴いて感じたことや想像した形や色を、音の特徴に合った動き、バランス、色の鮮やかさなどの造形的な特徴を考えながらアイディアスケッチをさせる。
- ・ 思いを表現する場面で、表したいことを色や形、材料の特徴や構成の美しさなどの感じや動き、バランス、色の鮮やかさなどの造形的な特徴について考え、主題に合った材料を選んで表現させる。
- ・ 思いを味わう場面（鑑賞）で、タブレットで自他の作品を音と一緒に鑑賞させ、音と造形的な特徴との関連や作品のよさについて味わわせる。※下線部は〔共通事項〕

また、児童の姿は、一つの場面や手立ての中に単独で現れるのではなく、複合的に現れるということも理解しておかなければならない。

(3) 題材の全体計画を考える

題材の全体計画は、児童が十分に考えたり、試行錯誤したりすることができるように計画することが大切であり、その時間を保障することも大切な手立ての一つである。

本題材においては、以下のように全4時間で計画し、本題材のねらいを達成するために必要な時間を十分に確保している。

時間	主な学習活動
1	<p>【見通しをもつ場面】</p> <p>1 参考作品（絵と音）を鑑賞する。</p> <p>【思いをもつ・見通す場面】</p> <p>2 題材のめあてについて話し合う。</p> <p>3 音を聴きながらアイディアスケッチをして、グループで交流する。</p>
2	<p>【思いを表現する場面】</p> <p>4 自分が絵に表したいと思った音の感じを、形や色を工夫して絵に表す。（中間鑑賞を含む。）</p>
1	<p>【思いを味わう場面】</p> <p>5 造形的な視点を基に、互いの作品を鑑賞し、感想を述べ合う。（タブレットで音を聴きながらの鑑賞）</p> <p>6 「音のする絵」の学習を振り返る。</p>

また、時間は、各学校の実態に合った設定をすることが大切である。もし、題材を終わらせることに追われていると感じているとすれば、年間指導計画の題材配列を見直し、題材の数を調整することから始めてほしい。

(4) 手立てについて考える

ア 導入で〔共通事項〕を明確に示す

授業を計画する上で明確にした題材のねらいや造形的な視点は、児童生徒が理解できな

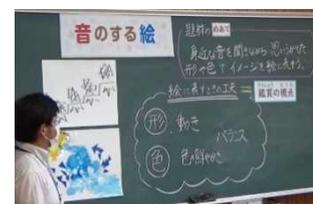


写真2〔共通事項〕を示した板書

れば意味がない。そのためには、まず題材の導入で学習内容とともに〔共通事項〕を示し、本題材のねらいを理解させることが重要である（写真2）。その際、教師が一方的に〔共通事項〕を教えるのではなく、参考作品等のよさを味わうこと通して、児童生徒の中から引き出し、実感をもって理解させなければならない。

イ 各場面に鑑賞活動を設定する

題材のねらいを十分に理解させ、その資質・能力を効果的に発揮させるためには、表現と鑑賞の活動を関連付けながら指導することが大切である。そのためには、「導入での鑑賞」、

「製作途中での鑑賞」、「完成後の鑑賞」を設定するとよい。鑑賞させる際は、ただ漠然と鑑賞させるのではなく、〔共通事項〕

の言葉をキーワード



写真3 製作途中の鑑賞の様子

ドに自分の作品について説明したり、友達の作品についての意見や感想を述べたりできるように指導することが大切である（写真3）。

ウ 活動やつぶやきをイメージする

発揮している資質・能力は、活動の様子から捉えることができる。教師がそれを的確に捉えることができるように、児童生徒の活動やつぶやきを想定しておくことが大切である。渡邊教諭は、指導計画の中で図1のように、活動やつぶやきをイメージしている。

4 自分が絵に表したいと思った音の感じを、形や色を工夫して絵に表す。(アイデアスケッチ→作品づくり)	2	○ 教科書の参考作品を見て、材料の活用について確認する。(色セロハン、色紙など)	形、色、動き、色の鮮やかさ
(期待する児童の姿)		○ 事前に録音した身近な音をタブレットで聞けるよう配信しておく。	バランス
この形は、色セロハンで重ねてみようかな!	この色ははっきり出したから、クレヨンで!	もう少し形を広げて、バランスよくしたい	もっと動いている感じを出すためにはどうしたらいいかな?
高くて短い音だから、明るい黄色にしよう。	低い音だから、少しにごった色かな…		
友達のあの色紙の重ね方は、私の作品にも使えるかもな。やってみよう。		○ 活動の途中で中間鑑賞をしてもよい時間を設ける。	
		○ 絵に表すときの工夫〔共通事項〕を再度確認する。	

図1 指導計画に「期待する児童の姿」を位置付けた例

このように、普段から児童生徒の思考を具体的にイメージしておくことで、製作途中でじっと作品を見つめている児童を見て、深く考えているのか、行き詰まっているのか分かるようになってくる。これも大切な授業づくりの一つである。

エ ICT機器を活用する

ICT機器は、感覚を通して理解することが大切な図画工作科・美術科にとって、相性のよい用具である。本題材では、導入の参考作品の鑑賞で製作過程



写真4 製作過程のスライド

をスライドで見せることで、具体的に作者の意図（思い）を理解させながら題材のねらいを捉えさせている（写真4）。また、製作途中



写真5 音を聴きながらの鑑賞

や完成後の鑑賞で、タブレットを使って実際の音を聴きながら作品を鑑賞させ、作者の意図や作品のよさを味わわせる工夫をしている。このように、題材のねらいに応じたICT機器の活用は、児童生徒がより感覚的に題材のねらいを理解することにつながる（写真5）。

6 おわりに

完成した作品（写真6）を見ていると、今にも音が聴こえてきそうである。そして、児童が音を聴きながら想像している様子や、形や色を工夫しながら構想を練っている様子が浮かんでくる。



写真6 「ジャロのジャーと流れる水」

そのような姿を見られる授業は、教師にとって幸せな時間ではないだろうか。

図画工作科・美術科は、作品という結果を見取るのではなく、児童生徒の活動そのものを見取る教科である。そのためには、教師が「造形的な見方・考え方」をもち、児童生徒の思考の流れに沿って、授業をイメージする力が必要である。本稿が、楽しい図画工作科・美術科の授業づくりの一助となれば幸いである。

－参考文献－

- 文部科学省『小学校指導要領解説 図画工作編』平成29年、日本文教出版
- 文部科学省『中学校指導要領解説 美術編』平成29年、日本文教出版

(教職研修課 濱川 達一)